「主よ」

マタイの福音書２６：２０－２５

March.28.2021

マタイの福音書２６：２０－２５（パワポ）

Preface

人間にとって最も大事なことは、神を知ることです。

人の想像の産物や彫刻師の手によって刻み出された物言わぬ息もしない偽りの神々ではありません。

天地万物をお造りになった全知全能の唯一の主なる神様を知ることこそ、人にとって最も大事なことです。

それと同時に、その唯一の神の前にあって、私たち人間は罪人であり、神との関係を正しく持ちたくても、自らの力では決して持つことが出来ない存在であり、神との関係を正しく持つことが出来ないゆえに、何をしても空しく、満たされず、消耗し、死を恐れ、やがて滅びることが定められているということを知ることも、同じように大切なことです。

そして、これよりももっと大事なことは、罪人である私たち人間が、空しく、満たされず、消耗し、死を恐れ、滅びることを良しとせず、いや、良しとしないどころか、天地万物をひっくり返しても到底理解出来ないほどの犠牲を払い、愛と赦しと和解をもって、私たち罪人を神が、滅びから救い出してくださったという事実を知ることです。

また何よりもあり得ないことは、罪人である私たち人間を贖いだす方法は、罪人の身代わりとなって、神自ら命を捨てる方法しかないということです。

これ即ち、神自ら、神の定めし摂理、秩序、法則をぶち壊すことです。

言葉で言いますと、簡単に言えてしまいますが、そんなこと到底有り得ないことですし、有る必要もなければ、有ってはならないことです。

この有ってはならないことに較べればビッグバンなんか取るに足りない些細なことですし、全くもってその大きさを正確に測ることも出来ないほどの大きな宇宙も小さくて小さいものでしかない程に、有り得ないことです。

にもかかわらず、神様は、私たち人にも分かりやすいように、人の形をとって、人となってお生まれなさり、人として苦しみ、人として血を流し、人として身を裂き、人として死なれました。

神であられる方が、人となって、多くの人のために罪の身代わりとなって、死

なれました。
　この唯一の神こそ、主イエス・キリストです。

　これは作り話でもなければ、昔話でもなければ、神話でもなければ、所謂、宗教の話でもありません。
　事実です。
　歴史的事実であり、自然界における事実であり、天地万物における事実です。

　本当のことである以外、何ものでもありません。
　本当のことです。
　本当のことだから、これまで、無数の人たち、無名有名にかかわらず数えきれない多くの人たちが、この事実を、すべてをかけて語り継いできました。
　　本当のことだから、生活を懸けて、人生をかけて、語り継いできました。

　私自身も本当のことじゃなかったら、妻もいて、子供も４人いて、お父さんお母さんが命を懸けて育ててくれたこの身をさらしてまで、こんなこと言いません。

　主イエスキリストの救いは、本当のことであり、比較できるものなんか何一つない真理です。

　宗教ではありません。　真理です。　現実です。

　正直言いまして、私は宗教が好きではありません。
　なぜなら、宗教には救いが無いからです。
　宗教に救いがあるのではなくて、主イエス・キリストに救いがあるのです。

「天の下で、この方以外には、誰によっても救いはないし、与えられてもいない」と、聖書が言っている通りです。

　そして、この主イエス様が、人間の強情で、どろどろで、どす黒い罪なる感情と行いによって、いよいよ十字架に架けられる前日、３年間歩みを共にした１２弟子たちと最後の夕食を取った場面が、先ほどお読みした聖書箇所です。

Part One

　イエス様は、これが弟子たちと取る最後の夕食になることを知っていました。
　しかし、弟子たちは知りません。
　まさかこれがイエス様と取る最後の夕食になるとは思いもしませんでした。

　なぜならば、イエス様が多くの人の罪の贖いのために、十字架に架かられ死ぬるということを理解も出来ず、受け入れることも出来なかったからです。

それまで、少なくとも３度、イエス様は弟子たちに、ご自分が多くの人のための贖いの代価として、そして永遠のいのちを与えるために、人々の手に引き渡され、殺され、そして三日後によみがえられることを話してきました。

軽いトークのように話したのではありません。

たくさんの人たちがイエス様を取り囲み、イエス様に従い、イエス様の話される言葉を聞きましたが、この十字架に架けられることとよみがえられることだけは、１２弟子たちにのみ、深刻に、真剣に、そして、これこそが主イエス様がこの地上に来られた理由であったことを話されました。

しかし、弟子たちは、理解も出来なければ、理解をしようともせず、ついには「そんな馬鹿な話があっていいものですか」と、否定までしました。

そのため、今イエス様と共にしている夕食が、十字架に架けられ死ぬる前夜の夕食だなんてことは知る由もなければ、知りたくもありませんでした。

でも、イエス様は弟子たちとは違い、覚悟を持って、この最後の夕食の食卓に着かれました。　　そして、ここで事件が起きます。

Part Two

以前、ティータイムの講師でいらっしゃった新札幌聖書教会の朴永基先生のお話の中にもあったことを覚えておりますが、
私たちは、食事をする時、心を開き、心の内側を話し、私たちの素の部分がポロッと出ます。
そして、この最後の夕食（晩餐）の時も、例外なくやっぱり、弟子たちの素の部分がポロッと出ました。

それも、とても重要な素の部分が出ました。

特に、この時の食事の席は特別で、思いもしなかった立派な大広間での食事で、少しわくわくするような、いつも以上に心の内側にあるものや素の部分が出やすかったのかもしれません。

食事の席で弟子たちは、いつものようにイエス様のことを呼ぶのですが、その何気ない呼び方に弟子たちの心の内、素が出ました。

１２弟子の内の１１人は、イエス様のことを“主”と呼びましたが、一人だけ、イエス様のことを“主”とは呼ばずに、“先生”と呼ぶ者がいました。
一見しますと、“主”という呼び名と“先生”という呼び名のどちらも同じ

ようで、そう大差はないように見受けられますが、“主”と“先生”との間には、雲泥の差があります。

そして、イエス様のことを“主”ではなく、“先生”と呼んだ弟子こそ、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダです。

いつになく特別な楽しい食事だったはずの席で、思いもかけない言葉を、イエス様は弟子たちに投げかけました。

「あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。」

一瞬、イエス様が何を言っているのか分からない、唖然とした空気になったことでしょう。　「え、何今の？」という感じでしょうか…
「今まで３年間寝食を共にして、酸いも甘いも一緒に経験し、これから大きなことをやってやろうじゃないかと辛くても共に歩んできた仲間の私たちに、なんて言葉をかけるんですか！？」という思いに満たされ、一同、たいへん悲しい気持ちになりました。

「イエス様、これまで大概のことは聞き流してきましたけど、こればっかりは違うんじゃないでしょうか…　そんな薄情な言葉ってありますか…」という気持ちに包まれたんでしょう。

聖書にこう記しています。

マタイの福音書２６：２２（パワポ）

弟子たちは、何とも言えないこれまでの苦労は何だったんだという思いに包まれたのかもしれません。

“大変悲しみながら”、一人一人、イエス様に「いや、私は違います」と訴えました。

イエス様のお言葉が納得も行かなければ、理解も出来ません。
「なんてこと言っちゃってくれてるんですか！？」という残念な思いに包まれましたが、それでも、一人を除いて皆、イエス様のことを「主よ」と呼んでいます。

先ほど話しましたように、食事の席では、その人の心の内側にあるものが自然な形で出やすいものですが、ここでも、あまりにも自然過ぎて、どこにも違和感を感じさせないほどに、ポロッと素が出ました。

それは、「主よ」というイエス様への呼びかけに良く表れています。

どんなにイエス様の言葉が理解できなかろうか、どんなにイエス様の言葉が薄情に感じようが、どんなにイエス様の言葉に呆れようが、どんなにイエス様の言葉に怒りのような感情が湧いてこようが、どんなにイエス様の言葉が悲しくて悲しくて仕方がなかろうが、
１１人の弟子たちは、イエス様のことを「主よ」と呼びかけました。

その気持ちを思うと、涙が出てきます。

詩篇を見ますと、このような“主よ”という言葉がたくさん出てきます。
到底理解も出来ず、到底受け入れることも出来ず、到底解決策を見出すことも出来ない、悲しくて、辛くて、痛くて、ため息さえも出ないような場面にあっても、“主よ”と神様のことを呼ぶ箇所だらけです。

どんなに理解出来なかろうが、どんなに悲しかろうが、どんなに冷たく感じようが、１１人の弟子たちにとって、イエス様は、それでもやっぱり“主”なんです。

弟子たちにとってイエス様は、人生すべて預け、全生活すべて委ね、全人格すべてをかけ、その方に依らなければ生きることが出来ないご主人様なんです。

ここで言う“主”という言葉は、主従関係を指します。
つまり、主人と奴隷の関係です。

奴隷は主人の所有物であります。
聖書には奴隷の人権を尊重するように命じている神様の言葉が記されていますが、通常世の習わしに従うならば、主人のさじ加減一つでどうにでもなってしまう運命にあるのが、奴隷の身分であり、そんな自分の身分を自ら認めて主人に告白するのが、“主よ”という言葉です。

弟子たちにとってイエス様は、それでもやっぱり、“主”なんです。

思わずポロッと口にする呼称に、彼ら１１人のイエス様に対する思いや姿勢が良く表れています。

Part Three

一方、イエス様のことを最後の最後まで、“主”とは呼ばなかった弟子こそ、イスカリオテのユダです。

ユダは、イエス様のことを“先生”と呼びました。

一見しますと、「先生と呼んで何が悪いんだ」と思えますが、“主”という呼び名と、“先生”という呼び名とは、月とすっぽんです。

イエス様のことを罠にかけようとした人たち、また、イエス様のことを試そうとした人たちが、イエス様のことを何て呼んだかと言いますと、“先生”です。

“先生”という呼び名に込められている思いは、外見的には敬意を表しているように装い、また、「自分たちは悪意なんていう野蛮なものとは程遠い、礼節を守ることの出来る教養のある人間なんですよ」という世間的評価や視線にまで気を使いながら、その真意はイエス様を罠にかけることと、試すことでした。

マタイの福音書２２：１５－１８，３５－３６（パワポ）

悪意を、“先生”という呼称で包み隠しました。

パリサイ人も、サドカイ人も、ヘロデ党の者たちも、律法学者も、罠にかけ試すために、しかも世間的体裁にも気を留めながら、イエス様のことを“先生”と呼びました。

パリサイ人、サドカイ人、ヘロデ党、律法学者を、現代風に言い換えるならば、信仰熱心な人も、奉仕熱心な人も、一般常識という秤では量りきれない聖書箇所は無き者とする人も、世間体を第一にする人も、政治活動や経済活動に熱心な人も、聖書に精通している人も、聖書に精通していない人も、学者も、イエス様のことを“先生”と呼びました。

そして、究めつけは、イスカリオテのユダが、イエス様を銀貨３０枚で売り飛ばして、群衆と一緒にイエス様を取っ捕まえに来た時、イエス様のことを読んだ呼称が、“先生”です。

マタイの福音書２６：４７－４９（パワポ）

涼しい顔して悪意を包み隠し、イエス様にあたかも敬意を表しているかのように装い、周りの人々には「私は悪意なんていう野蛮なものなど抱いてなんかいないクールな人間ですよ」と見せつけるかのように、
売り飛ばしたイエス様のことを「先生」と呼び、口づけまでしました。

これが私たち人間の怖いところであり、罪の巧みさです。
何食わぬ顔して、いや、笑いながら、涼しい顔して、余裕を振りまきながら、悪意を抱き、それを実行に移すことが出来るんです。
大人だけでなく、子供だって出来ます。

“先生”という呼び名に込められた思いは、
研ぎ澄まされ洗練された刃が、美しい程に光り輝くものの、その目的は人を切るためであるということに似ているかもしれません。

そして、ユダにとってのイエス様は、自分の力を見せつけるために、その美しく光り輝く刀を身に付けるかのような道具でしかなく、もしイエス様が望むような輝き方をしてくれないならば、いつでも手放し替えのきく存在です。

事実ユダは、ここまで何度もイエス様に幻滅してきました。

「カリスマをもって、軍事力を蓄えローマ帝国を打ち破らなければならないのに、『敵を愛せよ』なんて言っていて、いつローマを打ち倒すのか！？」

「せっかく１万人近くの人たちを奇跡によって腹いっぱい食べさせて魅了したのに、みんな解散させて、一人暗がりに行って祈るなんていう弱い姿しか見せてくれない。」

自分の狭い考えに、神であられるイエス様を押し込もうとするので、幻滅しか出てきません。
だから、最後の最後まで、イエス様のことを“主”とは呼べずに、最後の最後まで“先生”でしかありませんでした。

Part Four

ユダにとってイエス様は、“主”ではなく、“先生”でしかありませんでした。

確かに立派な人かもしれない。　不思議な方かもしれない。　ものすごい知恵や知識をお持ちかもしれない。　慈愛に満ちた方であり、時には厳しさだって的確にお示すになる桁違いにバランスの取れた方かもしれないけれども、
所詮行き着くところ、世界の四代聖人の内の一人という枠を超えることはありません。

ユダは、所謂、とても出来る人でもありました。
財務担当として冷静な判断、的確な指摘、分析の出来る人でした。

年収に匹敵する香油をイエス様に注いだ女性に対して、「なんて勿体ないことをしているんだ！　それを売れば、貧しい人たちに施しが出来たのに！」と、正論を導き出し、その正論を躊躇なく口にし、常識的に間違いだと思われるものを的確に指摘できました。

しかし、彼には、感動がありませんでした。
イエス様が、一文無しで１万人の人をお腹いっぱいに食べさせようが、荒れ狂

う嵐を鎮めようが、語る言葉に真理が満ち溢れようが、
　年収に値する高価な香油をイエス様に注いで、十字架に架かられることを感謝しながら記念しようが、感動がありません。

　感動がないということは、成長がないということです。　成長がないということは、死んでいるということです。　死んでいるということは、イエス様のことを“主”とは呼べず、“先生”とまでしか呼べないということです。

　なぜならば、主イエスにのみ、まことの命があるからです。

Part Five

　皆さんにとって、イエス様は“主”でしょうか？
　それとも“先生”でしょうか？

　最後まで“先生”としか呼べなかったユダは、その人生の最後に、イエス様のことを銀貨３０枚で売り飛ばしたことを後悔し、その後悔した気持ちをもって、自分で自分の尻拭いをするかのように、首をつって自死しました。

　イエス様のことを知らなかった人ではありません。
　イエス様と寝食を３年間も共にし、イエス様のなさったことを最も近くで見、イエス様の話されたことを最も近くで聞いた彼が、最後に頼ったのは、自分の力であり、立てようとしたのは自分のプライドです。

　ユダの自死は一見しますと、潔い締めくくり方のように見えますが、イエス様はこんなこと微塵も望んでおられませんでした。

　ユダは最後の最後まで、自分の方法で、自分のやり方で、自分の時に、自分なりの仕方で、自分なりのけじめのつけ方で、決着をつけたつもりになってしまいましたが、これで決着はつきません。

　イエス様がユダに望まれた決着のつけ方は、悔い改めることです。
　悔い改めと後悔は、全く別物です。

　後悔は誰にでも出来ますが、悔い改めは、イエス様を“主よ”と呼ぶ者にしか出来ません。

　ペテロは、泣き崩れながら悔い改めました。
　ペテロにとって、イエス様を裏切るということは、後悔という程度で留めて置けるものではありませんでした。
　背を向けたことを悔い改め、再び、神の前に顔向け、ひれ伏したのです。

後悔は誰にでも出来ますが、悔い改めは、信仰と聖霊に促されなければ出来ません。

後にペテロが使徒の働きで、「イエス様を十字架につけたのは罪人であるあなたがたです」と説教をして、その説教に心刺されイエス様を信じたいと申し出た３０００人もの人が、「私たちは、どうしたらよいでしょうか」と訊きますと、ペテロは「悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」と勧めました。

つまり、信仰は悔い改めでもあります。
後悔ではありません。　悔い改めて、神に背を向けていることを辞めることが悔い改めです。

神の前に正直に自分の無様さを、恥ずかしげもなく、開けっぴろげにさらけ出せる恵みが、悔い改めです。

ここまで色々と話してまいりましたが、信仰のある方も、信仰があると思っている方も、また、まだ信仰のない方も、信仰がないと思っておられる方も。一緒に悔い改めましょう。

後悔ではなく、悔い改めにこそ、祝福があります。恵みがあります。解放があります。知恵があります。　知識があります。　そして、そこから真理の道が開かれます。

今日は、イエス様の受難を覚えながらの聖餐式が執り行われますが、洗礼を受けている方も、まだ洗礼を受けておられない方も、悔い改める気持ちをもってこの聖餐の時を味わえればと願います。

お祈りいたしましょう。

祝祷：使徒の働き２：３８